

## 研究ノート

### ラクダとブローカー

—ケニア北東部のラクダ市場におけるディラールの実践—

楠 和 樹\*

### Brokers in a Camel Market in Northeastern Kenya

KUSUNOKI Kazuki\*

The predominant form of livelihood in the south of the Horn of Africa is livestock production by Somali pastoralists. Livestock and related products have been exported from this area on a large scale for decades, and this has prospered even after the collapse of Siad Barre's dictatorial regime in Somalia. This informal economic activity is characterized by a chain of actors, including *shirkad* (large-scale companies), *gana'sade* (large-scale traders), *jebble* (small-scale traders), *dilaal* (brokers), and *raa'i* (trekkers). Among these, *dilaal* are sometimes characterized as a negative component of market transactions. They are market negotiators, and their employment is a traditional part of the livestock trading system. They are regarded as being dishonest with herders, who are not accustomed to market negotiations, and are said to be greedy and raise their fees from unwary traders and herders. Based on fieldwork in a primary market for camels in Modogashe, northeastern Kenya, this paper aims to examine their activities and their social implications. For the camel herders in the bush (*reer baadiya*), *dilaal* are indispensable as mediators with livestock traders (*reer magaalada*), who are culturally distinct from them.

#### 1. はじめに

現在のケニア北東部、ソマリア南部、そしてエチオピアの南部から東部に当たる、いわゆる「アフリカの角」の南部では、長きにわたって主要な生業として牧畜が営まれてきた。この地域は、ウシを中心とした家畜の広域的な交易活動の舞台にもなっている。とくに、1991年にソマリアが内戦状態に突入してから現在に至るまで、この地域の国境を越えた家畜交易は急激

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo  
2023年1月12日受付, 2023年4月3日受理

な成長を遂げているとされる [Mahmoud 2010].

この経済現象は研究者だけでなく開発実務家の関心を集めてきたが、彼らによるとそこには2つの特徴を見出すことができるという。第一に、この活動は本質的にインフォーマルなものである [Little 2003; Pavanello 2010]。家畜は生産地から最終市場まで、フォーマルな制度にほとんど関与することなく流通している。その輸送網はアフリカの大陸内にとどまらず、海を渡って中東にまで到達している。国家によるそのプロセスへの介入は限定的に過ぎない。そのため、輸出頭数などに関する公式の有効なデータも限られており、その実態はおおまかにしか把握されていない。

第二の特徴としては、この広域的な交易ネットワークが多様なアクターによって支えられているという点が挙げられる。エチオピアのソマリ地方で調査をおこなったウマルらによると、この地域に暮らす牧畜民のソマリによる家畜交易は、買い付け会社 (*shirkad*)、大規模商人 (*gana'sade*)、小規模商人 (*jeble*)、ブローカー (*dilaal*)、そして搬送人 (*raa'i*) などの人々がそれぞれの役割を果たすことによって成り立っていた [Umar and Baulch 2007]。このうち、人類学者がこれまでの研究でもおもに着目してきたのが、商人の活動である。その関心は、商人たちがどうやってリスクで不安定な環境でビジネスをおこなっているのかという問いに向けられ、彼らが個人的、民族的な信頼のネットワークを駆使することでリスクをかいくぐり、成功を収めていることを明らかにしてきた [Little 1992; Mahmoud 2008]。それに対して、本論ではソマリ語でディラルル (*dilaal*) と呼ばれるブローカーの存在に焦点を当てる。後述するように、彼らは市場で家畜の売り手と買い手をむすびつけ、取引を促進させる存在である。しかし、これまでの研究では彼らの実践を詳細に検討することなく、<sup>1)</sup> 利益をかすめ取る者として否定的に評価してきた [Mahmoud 2013: 101-102; Samatar *et al.* 1988]。本論ではこのような評価を前提とすることなく、彼らが市場でどのような活動をおこなっており、それが社会のなかにどのように埋め込まれているのかを明らかにすることで、家畜交易のネットワークの理解を深めることを試みる。

本論のための調査は、ケニア北東部のモドガシ市を中心として2010年9月から2011年2月にかけて実施した(図1)。調査当時、この街にはラグデラ県の中心地として県庁が置かれていたが、2011年に州県制が廃止されてからはガリッサ郡の一都市となっている。

この地域は半乾燥地に分類される生態環境であり、年降水量は250から300ミリメートル、気温は20度から38度である [Republic of Kenya 2008: xvii]。モドガシの周辺の住民のほとんどはラクダ牧畜をおもな生業とするソマリで、とくにアウリハンと呼ばれるクランによって占められていた。調査期間中、筆者はこの街で週に1度開催されるラクダ市場で観察と聞き

---

1) 例外として、曾我 [2019] を参照。

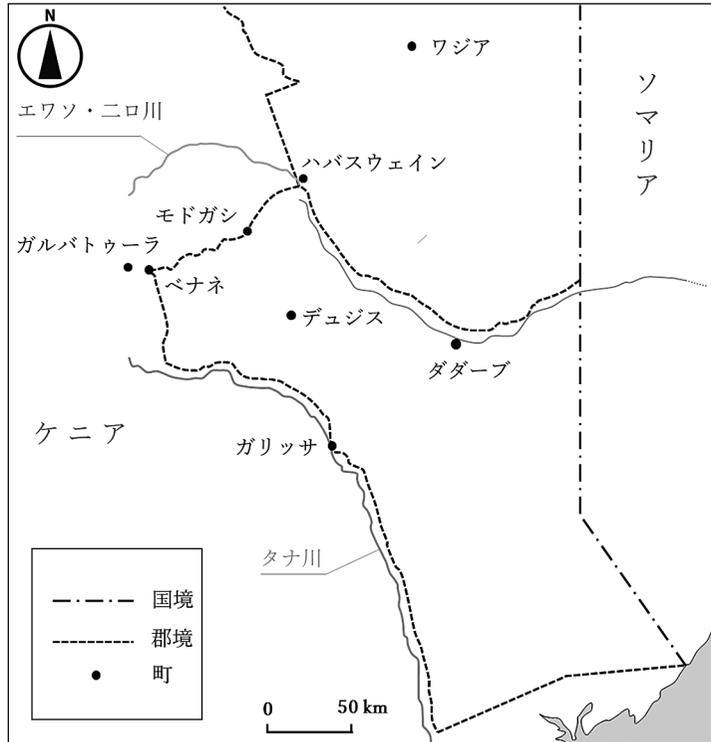


図1 ガリッサ郡とモドガシ市の位置

出所：筆者作成。

取りをおこなった。また、それ以外にも街の周辺の集落でアウリハン・ソマリの人々にラクダの飼育について聞き取り調査をおこなった。

## 2. 市場の概要

モドガシ市には、家畜を商品として取引する2種類の市場が存在する。ヤギとヒツジ—すなわち小家畜 (*ari*) —を対象とする市場 (*suuqa ari*) と、ラクダのみを扱う市場 (*suuqa geer*) である。<sup>2)</sup> 前者が開設されたのは30年以上前のことだが、後者は2007年に始まったばかりである。それは、この街に県庁を置くラグデラ県が新設されたのと同じ年の出来事であり、モドガシをふくむ県内の各地に家畜市場を設置し、供給を促進することを最優先課題とし

2) この市場では、ラクダだけでなくロバとウシも取引されることになっている。したがって、本来は「大家畜の市場」(*suuqa ishiqin*) と表記すべきところである。しかし、実際にはロバもウシもほとんど取引されておらず、人々も「ラクダの市場」と呼んでいる。本論では、取引のこのような実態を踏まえて、以下では後者の表記を用いる。

表1 ラクダの市場に連れて来られたラクダの頭数

	コドモ	オトナ	合計
メス	21	18	39
オス	61	6	67
合計	82	24	106

出所：2011年1月10日、17日、31日、2月7日に開かれた市場での観察、聞き取りをもとに筆者作成。

て位置づける、県の開発計画に沿っていた [Republic of Kenya 2008]。また、前者が基本的に毎日開かれるのに対して、後者が立てられるのは月曜日のみである。

2つの市場は立地においても異なる。小家畜の市場は街の中心に位置する空き地で開かれる。周囲には商店が立ち並ぶ好立地である。それに対して、ラクダの取引は中心部から歩いて5分ほど離れた空き地でおこなわれる。この市場を外部から空間的に分離する装置はなく、開市日以外のときは集落から買い出しやミルクの販売で街を訪れる人々の通り道になっている。また、市場の周辺には木の枝でできた簡素な小屋 (*makaayad*) が点在している。この小屋は普段は放牧中の家畜が入ってこないように有刺木の枝で入口を閉じているが、市場が立つとお茶や簡単な料理がふるまわれ、ミラーと呼ばれる嗜好品が出される。そこは、交渉の成立を待つ売り手や、休憩を取りに来た商人とディラール、そして彼らとおしゃべりに来た街の人々で賑わう。

このような質素な光景は、市場の取引規模の小ささを反映している [楠 2019: 202–203]。筆者がこの市場で4日間おこなった参与観察と聞き取り調査によると、この間に連れて来られたラクダの総数は106頭で、1日あたりの平均は26.5頭であった(表1)。調査時点では取引頭数が減少傾向にあると語られており、多いときには100頭のラクダが姿を見せるというが、周囲のほかの市場と比べると小規模なのは事実である。また、106頭のうち実際に売却されたのは71頭に過ぎなかった。残りの35頭のうち10頭はその後の経過が不明だが、25頭については売買が成立することなく、持ち主によって連れ帰られた。

モドガシ市の役人によると、この街の市場は二次市場に家畜を供給する一次市場のひとつとして位置づけられるという(表2)。<sup>3)</sup>モドガシと同じ程度の規模の一次市場としては、ハバスウェイン、ガルバトゥーラ、ベナネ、デュジスが挙げられる(図1)。これらの市場で取引されたラクダの多くは、二次市場であるガリッサとダダーブで転売される。ガリッサはケニア北東部の中心都市のひとつであり、州県制の時代には北東州の州庁が設置されていた。他方で、ダダーブの周辺には難民キャンプ群が置かれている。<sup>4)</sup>これらのキャンプは、1991年のシアド・バーレ政権の崩壊後不安定な状態が続いているソマリアからの難民を受け入れるために開設さ

3) 2010年10月13日のラグデラ県畜産担当官への聞き取りより。

4) 筆者の調査時点ではダガハレー、イフォ、ハガデラの3ヵ所に設置されていたが、その後別の場所に新設された。

表2 家畜市場のタイプ

家畜市場のタイプ	概要
ブッシュの市場	生産者が別の生産者や小規模な商人に家畜を売却する。その目的は繁殖や一次市場での転売である。
一次市場	生産者や小規模な商人がその他の生産者や、より取引規模の大きな商人に家畜を売却する。通常、県の主要な街に位置する。
二次市場（最終市場）	大規模な都市に位置する。精肉店が大規模な商人から家畜を購入する。その後、屠畜場で屠畜、精肉し、販売する。

出所：Pavanello [2010: 17] をもとに筆者作成。

表3 ラクダの市場における買い手の内訳

買い手の属性	頭数
家畜商人	46
精肉店	12
その他	9
不明	4
合計	71

出所：2011年1月10日、17日、31日、2月7日に開かれた市場での観察、聞き取りをもとに筆者作成。

れたものである。現在は減少傾向にあるものの、筆者が調査をおこなった2011年の時点でおよそ39万人の人々がそこで暮らしていた [UNHCR 2011]。ガリッサを上回る人口を擁するダダーブは、難民キャンプという表向きの顔の裏に、多種多様な商品が集積し大規模な消費がおこなわれる大都市としての側面ももっている [内藤 2019]。ダダーブには屠畜場も置かれており、大きな食肉需要を引き起こしている。

以上のように、モドガシの市場はガリッサとダダーブで転売するラクダの仕入先となっているが、それにとどまらない側面もある。表3は、4日間で取引されたラクダの頭数を買い手の属性ごとに整理したものである。このうちもっとも多かったのが家畜商人で、全体のおよそ65パーセントを購入していた。次に多かったのが、精肉店 (*bucher*) である。モドガシの市内には9軒の精肉店があるが、ほとんどの店ではヤギ肉のみを扱っており、ラクダ肉は2軒でしか入手できない。これらの店は、市内に2ヵ所ある屠畜場で早朝に屠畜されたラクダを搬送し、精肉している。そのうちの1軒におけるラクダ肉の部位ごとの価格をまとめたものが、次の表4である。個体差はあるが、1頭のラクダからは150から200キログラムの肉がとれるという。<sup>5)</sup> ここでは部分肉と内臓肉はもちろん、骨やコブなどの副生物も販売されてい

5) 2011年2月20日の聞き取りより。

表4 ラクダ肉の部位ごとの価格

部位	価格 (KSh)
部分肉 (1 キロ)	250
皮	300
肝臓	240
腎臓	240
肋骨まわりの肉 (1 本)	230
首肉 (8 つに分割したもの)	100
尾の付け根の骨 (2 つに分割したもの)	180
コブ (4 つに分割したもの)	150

出所：聞き取りにより筆者作成。

た。モドガシはラクダの仕入地であるのと同時にその消費地でもあるのだ。

さらに、この市場は食肉供給とは異なる機能も担っている。表3の「その他」には、地元のアウリハン・ソマリの牧畜民がメスラクダを購入した事例がふくまれていた。ソマリの多くのクランと同様に、彼らはラクダ、ウシ、ヤギ、ヒツジを飼育しているが、このうち経済的、社会的、政治的、そして宗教的にもっとも重要なのがラクダであり、その増殖に強い関心を払っている [Lewis 1961]。モドガシに市場ができるまで、彼らが群にメスラクダを加える手段は小家畜との交換しかなかった。そのため、当時は小家畜を必要とする者を探し求め、第三者の立ち合いのもとで交渉をおこない、手に入れていたという。<sup>6)</sup> 市場の創設は、彼らに貨幣との交換によってメスラクダを入手する場を用意し、群の多産性を回復する手段を提供したことになる。ケニア中北部の牧畜民サンプルが家畜市場を同様の目的で利用していることは、湖中 [2006] によって報告されている。この指摘と筆者による観察は、市場を通じて「畜群の繁殖力を自然の成長力以上に強化」[湖中 2006: 84] する志向が、東アフリカの牧畜民に広くみられる可能性を示唆している。

### 3. 財としてのラクダ

モドガシの市場の概要については前節で述べたとおりだが、それではラクダはどのような経緯でこの市場に調達されるのだろうか。本節ではこの点を検討する。

ラクダの買い手が家畜商人、精肉店、そして牧畜民に分かれるのに対して、その売り手はモドガシの周辺で放牧する牧畜民である。彼らのほとんどはソマリで、とくにこの地域に多いアウリハン・クランの人々によって占められる。市場で彼らになぜラクダを売却することにしたのかを訪ねたところ、学校の授業料、衣服や食料の購入、商店への負債の支払い、結婚式のた

6) メスラクダ1頭あたりの相場は小家畜およそ15頭だったという。2010年12月12日、13日の聞き取りより。

めの費用の捻出、そして病気の治療費の支払いなどの理由が挙げられた。これらの理由はいずれも、彼らが差し迫った経済的な問題に対処する必要があったことを示唆している。そして、それはラクダがほかのモノとは異なる特別な財の領域を構成していることを背景としている。

ラクダがどのような財なのかを明らかにするためには、小家畜との比較が有用である。というのも、財を人とモノの関係ではなく、モノをめぐる人々のあいだの関係として捉えるならば [ファーガソン 2020: 214-235]、両者は対照的といっているほど異なるからだ。

ソマリは一夫多妻制の社会であり、最小の親族単位は妻とその子どもたちからなる。ソマリ語ではイド (*id*) と呼ぶが、本論では以下これを「世帯」と表記する。また、家長 (*duq*) を中心としてその複数の妻の世帯からなる集団のことを、便宜的に「一族」と呼ぶことにする。単純化した言い方をすると、ソマリにおいて小家畜とラクダはそれぞれ個人の所有物とされるが、同時に前者は世帯の、そして後者は一族の財でもある [楠 2019: 198-201]。小家畜は世帯ごとに放牧、管理される。集落が同じ一族の複数の世帯によって構成されている場合でも、小家畜の群は世帯によって異なる囲いに入れられ、その放牧は各世帯の年少者が担当する。また、小家畜を処分する際には所有者が自由に判断する裁量を認められており、家長や一族の別の成員から許可を得る必要はない。それとは対照的に、ラクダは原則として一族の単位でまとめて管理、放牧される。その放牧は、一族内の年長の男性によって担われる。個々のラクダには所有者がいるものの、その者が成人後に独立して別の集落を構えるまでは、一族にも帰属すると考えられる。この点について、ソマリの古典的な民族誌を著した社会人類学者のルイスは次のように述べている。「ラクダの増加とリネージの拡大は同一なものとなされ、クランで所有されるラクダは創始者から受け継がれてきた世襲財産として考えられる」 [Lewis 1961: 85]。そのため、ラクダについては家長や一族のほかの成員の同意を得ることなく、所有者個人の裁量によって処分することは認められていない。

ルイスによると、ソマリにとって「ヤギとヒツジは生活上のニーズを満たすための家畜に過ぎないため、ラクダほど関心は払われない」という [Lewis 1961: 85]。実際のところ、アウリハン・クランの人々は手元に現金がなくて必要になった場合、抵抗感なく自分の小家畜を市場に連れていく。売却によって得た現金をどのように使うかはその人の自由であり、その用途について家族から口出しされることはない。ある牧夫によると、「久々に放牧地から町にやって来て、1日楽しむお金が欲しいというだけの理由で売ったっていい」という。<sup>7)</sup> ラクダはこの点でまったく異なる。というのも、ラクダと現金のあいだには「一方的な障壁」 [ファーガソン 2020: 215-223] があり、後者の交換で前者を得ることは可能でも、前者を後者に換えることは原則として容認されないからだ。それが許されるのはあくまで例外的な出来事であり、具

7) 2011年2月26日の聞き取りより。

体的には前述のように学校の授業料や思わぬ病気の治療費の支払いなど、経済的に差し迫った状況に限られる。しかも、何をもって「差し迫った状況」とするかについて明確な基準が存在するわけではない。そのため、ラクダの売却に当たってはなぜ問題を解決するのにその選択肢を採らざるをえないのかについて家長をふくむ一族の成員を説き伏せ、合意を取り付けなければならぬ [楠 2019: 208-216]。

ラクダに「一方的な障壁」の規則が維持される背景としては、第一に、貨幣に対する人々の警戒感が挙げられる。アウリハン・ソマリのうち、町から離れてラクダなどの家畜を放牧する牧畜民は、みずからを「原野の人 (*reer baadiya*)」と呼ぶ。彼らは、町で都市的な暮らしを送る「町の人 (*reer magaalada*)」とは、ライフスタイルの点で差異化される。前者は後者と比べて貨幣との付き合い方に習熟しておらず、「お金の数え方も知らない」と揶揄されることもある。彼らはラクダを売ればヤギを売るよりも数倍から数十倍多い額の現金が手に入ると認識しているが、それがミラーや香水を買うなど、贅沢 (*iyar*) のために浪費されることを恐れている。この点について、ある老牧夫は自虐的にこう語った。「自分はラクダの扱いには慣れている。しかし、お金についてはそうではない。ポケットに入れておいたら、なくなってしまうだろう。」<sup>8)</sup>

第二の背景としては、貨幣の発行主体である国家に対する不信任感がある。ケニアの北東部では独立直後の1963年から1991年に至るまで、ソマリによる分離独立運動を制圧するという名目で強権的な法令が施行され、法的な例外空間に置かれていた。この間、人々は警察と軍による日常的なハラスメントの被害に遭い、ときに集落や家畜群を襲撃されていた [Whittaker 2015]。この時期を知る年長者は、貨幣の交換可能性がつねに頼りになるわけではないと考えており、逆にラクダがいかに頼りになる存在なのかを強調する。混乱の時代にソマリア側に逃れたというある商人の男性は、その経験を次のように語った。「あるとき、私はたくさんのお金をもっていた。しかし、乗り物も肉もミルクもなかった。お金は重すぎるほどもっていた。私は死ぬところだった。もしもお金を食べていたら腹痛を起こしていただろう。」彼はこのときの経験から、現金で蓄財するだけでなくラクダの群も持つようになったという。それは、将来再び政府から理不尽な扱いを受けるときに備えて、高い移動性を維持することにほかならない。次の言葉は、そうした事態におけるラクダへの信頼の高さを物語っている。「今から原野にラクダとともに行ったとしても、私は飢えることなく満足するだろう。(ミルクがあれば料理する必要がないので) 火も起こす必要もない。居住用のテント (*akal*) を運ぶこともできる。この世界には、ラクダを飼う人、ウシを飼う人、そして小家畜を飼う人の3種類の人がいる。旱魃が起ると、ウシを飼う人と小家畜を飼う人はラクダを飼う人のようにたくさんのお金を得ることはない。」<sup>9)</sup>

8) 2010年12月2日の聞き取りより。

9) 2010年12月1日の聞き取りより。

## 4. ディラールによる交渉

### 4.1 ディラールとは

以上のように、市場には「一方的な障壁」を乗り越えたラクダが連れて来られるのだが、その取引において売り手と買い手が直接対峙することはほとんどない。前述のとおり、市場ではディラールと呼ばれるブローカーが両者に代わって、売買の交渉から代金の引き渡しまでをおこなうのが通例となっている。

取引の標準的な手順は次のとおりである [楠 2019: 201–202]。まず、売り手である牧畜民がラクダとともに市場に現れると、ディラールが近寄っていく。通常、市場の日には20人ほどのディラールが集まっている。売り手は希望する売却価格をディラールに伝えると、あとの交渉は彼に任せてその場を立ち去る。ディラールはそのあいだに買い手を代理するディラールを探し、交渉する。売り手と買い手の希望価格に大きな隔たりがある場合、売り手に価格の引き下げを打診することもある。交渉がまとまると、ディラールどうして固い握手を交わし、妥結した内容を唱和しながら握った手を大きく振り上げる。振り上げた手が勢いよく離されたとき、両者のあいだで正式に合意が成立したことになる。その後、売り手からディラールを通じてラクダが引き渡され、逆に買い手はディラールを通して代金を支払う。また、ディラールは1頭あたり200 シリングを取引の報酬として受け取る。<sup>10)</sup>

ソマリにおけるディラールは、西インド洋の交易圏との接触のなかで形成された商慣行のひとつである。<sup>11)</sup> ソマリが広く居住する「アフリカの角」はインド洋の北西部に位置することから、古くから外来の商人に対応する制度が発達してきた。14世紀にモガディシュを訪れたイブン・バットゥータによると、この街に外からやって来た商人は主人（地元商人、船宿）の客として歓待され、その主人が彼の代わりに商品を売りさばき、所望する商品を仕入れたという [イブン・バットゥータ 1998: 138]。『大旅行記』の翻訳者である家島彦一によると、こうした「客人（外来商人）の滞在中、主人（地元商人、船宿）は客人の滞在に必要な宿舎、食事、倉庫の世話、持参した商品の保管・売却と現地商品の購入などの一切の仕事を請け負い、客人は現地社会とは全く接触しない」商業形態は、「前近代のイスラム世界の周縁部各地で広く見

10) ケニアの通貨はケニア・シリング (KSh) である。1ケニア・シリングはおよそ1円である。

11) ソマリ語のディラールはアラビア語の語彙に起源をもつとされるが [Mahmoud 2008: 563]、同じ語に由来すると思われる類似のブローカーの存在は、ソマリの地域のほかに各地の市場で報告されてきた。その例としては、エチオピアのデララ (*delala*)、ナイジェリアとガーナのディラリ (*dillali*)、そしてインドのダラル (*dalal*) などが挙げられる [Abir 1965; Björkman 2021; Cohen 1965; Dupire 1965; Hill 1966; Usman *et al.* 2009]。たとえばナイジェリアのボルノ州の魚市場で調査したウスマンらによると、この市場では買い手側のディラリと売り手側のブローカーであるヤン・アチャ (*yan acha*) が売買をおこなう。ナイジェリアの多くの市場では農民は生産物を直接消費者に届けてはならず、取引をディラリに託すという [Usman *et al.* 2009]。このことから、伝播の過程と範囲は不明ではあるものの、これらのブローカーの実践はムスリムの商業実践として広域的に広まった可能性があると指摘されている [Gabre-Madhin 1999: 6]。

られた」ものである。そして、この制度を利用することで「外来商人としての客人は馴染みの無い異境の地でも、安全に滞在し、仲介による商売を行うことが出来た」[イブン・バットゥータ 1998: 216]。ディラールはこうした仲介的な商業実践の歴史的な系譜のうえに位置づけられるものであり、20世紀前半に「アフリカの角」で家畜流通が盛り上がった時期に登場したとされる [Samatar *et al.* 1988]。

#### 4.2 媒介者としてのディラール

取引をディラールに委託することは、買い手と売り手の双方にとってメリットが大きい。買い手の大半を占める家畜商人は典型的な「町の人」であり、買い付けの日だけ大都市からモドガシにやってくる。そのため、彼らは必ずしもラクダについて精通しているわけではない。彼らが恐れるのは、問題のあるラクダを購入してしまうことだ。購入したラクダが病気や怪我を患っていたら、転売先の市場に徒歩で移送できなかつたり、最悪の場合は売り物にならなかつたりする可能性がある。また、市場に持ち込まれるラクダが盗品であったり、若者が家長の許可を得ることなく勝手に持ち込んだものだったりするかもしれない。そうした事態を避けるために、「町の人」ではあるものの「原野の人」とも付き合いがあるディラールは問題のないラクダを選抜し、商品としての安全を保証する役割が期待されている。

他方で、売り手であるアウリハン・ソマリの牧畜民は前述のように多額の貨幣の扱いに慣れていないため、家畜商人との直接交渉に尻込みしている。それだけでなく、彼らは商人がラクダをどのように評価するのが分からないことも懸念する。一般的にソマリはラクダ牧畜民として知られるが、実際にはその居住地域の生態的な多様性を反映して、ウシの放牧や農耕をおもな生業とする人々も多い [Besteman and Cassanelli 2000]。アウリハン・クランの場合、ウシを多少飼育しているものの大家畜の中心はラクダである。彼らはみずから「ラクダの人 (*reer geer*)」として認識しており、その扱いに通暁していることを誇っている。それに対して、彼らのラクダを買い付けてガリッサとダダーブの二次市場で転売する家畜商人は、同じソマリではあるものの、ラクダよりもウシの放牧を主とする「ウシの人 (*reer lo*)」である。

アウリハンの牧畜民は、「ウシの人」によるラクダの扱い方が正しくないことをたびたび強調し、ときに揶揄する。ある牧夫は、ラクダが迷子になった (*muuda*) 状況を引き合いに出して、この点を説明した。ラクダは知能が高いため過去の放牧地を記憶しており、懐かしくなれば牧童の気づかないうちに群を抜けてそこに戻ってしまうことがある。その場合、牧夫は別の家畜や野生動物の足跡と見分けながら何日もかけてその足跡を追跡し、探し出す。しかし、「ウシの人」はそうした事態が起こってもただ戸惑うしかないのだという。また、彼によると両者の違いはラクダの名づけ方にも表れる。アウリハンの場合、オスラクダは母の名を引き継ぎ、メスラクダには体色や泌乳量など、身体的な特徴にちなんだ名前を与えるのが一般的である。たとえば、泌乳量の多い個体はホーバ (*hooba*)、少ない個体はイダイ (*idai*)、ミルクを

絞るときの勢いがいい個体はシリコ (*siliko*) と呼ばれる。しかし、彼は「ウシの人」のクランではそのようなやり方は共有されていないと語る。「私たちはさまざまな特徴にちなんでラクダの名づけをする。しかし、彼らはラクダの性質に関係のない名前をつけることが多い。たとえば、そのラクダを購入した町の名前や、雲 (*door*) のような (ラクダの性質と関連性の薄い) 名前をつける。私たちはそうしない。」<sup>12)</sup>

重要なのはこれらの語りの真偽ではなく、それがラクダをめぐる他者性を強調していることだろう。牧畜民にとって家畜商人は、「町の人」であるのと同時に「ウシの人」でもあるという点で、二重の意味で他者である。そして、彼らはディラールという媒介者を通じて商人が自身のラクダの価値を正しく評価することを期待している [楠 2019: 220-230]。たとえば、商人はラクダに傷や腫物があると警戒する可能性があるが、それらは転売先まで搬送するうえでは問題ないかもしれない。また、ラクダを食肉として消費する場合、同じ大きさの個体でも脂肪の部位が少ないもののほうがより多くの肉がとれる。そのため、太った (*barur*) 個体よりも肉付きのいい (*buuran*) 個体を見極めるのが重要である。ディラールは買い手や買い手側のディラールとの交渉でこうした説明を重ね、誤解があればそれを打ち消すことによって、ラクダに妥当な価格がつくようはたらきかけるのだ。

#### 4.3 信頼と狡知

上記の理由から、売り手である牧畜民は同じクランやリネージに属するディラールに仕事を依頼する傾向がある。また、クラン関係が遠くても信頼できる知人にラクダを託すケースも多い。

牧畜民とディラールの関係の理解を掘り下げるために、筆者がもっとも懇意にしていたモハメッドというディラールの事例を検討しよう。<sup>13)</sup> モハメッドはアウリハンのなかでも主流派のアリというセクションに属しており、ディラールとしてアリの牧畜民のラクダの売買を多く手掛けていた。彼はディラールとしての経験が豊富なだけでなく、ほかのクランとの紛争の際には勇敢に戦ったことから、周囲の人々から一目置かれる存在だった。他方で、彼のもとにはアリ以外のセクションや、アウリハン以外のクランの人間がディラールを依頼しに来ることも多かった。あるとき、アウリハンのうちアフワというクランの牧夫がモハメッドにディラールを頼みに来た。アフワはウシの牧畜を中心とする少数派のクランで、モドガシから遠く離れた集落を拠点としている。彼らがラクダを売却しにモドガシを訪れるのは珍しく、そこにはアフワ出身者のディラールもいない。モハメッドになぜ彼がディラールを依頼されたのかを訊ねたところ、次のような答えが返ってきた。

12) 2011年1月29日の聞き取りより。

13) 本稿ではインフォーマントの個人名については仮名を用いている。

自分はディラールの仕事を始める前、ラクダの放牧をしていた。ディラールを始めてからは、それを弟に任せた。当時、ここから遠い集落の辺りでも放牧することがあった。そのとき、アフワの人々との付き合いがあり、彼らのもつラクダも見て、知るようになった。アフワはほかのディラールが彼らを騙そうとしていると考えているが、自分のことは信頼してくれている。<sup>14)</sup>

ここで注目されるのは、彼が自分が信頼されている理由として挙げたのは彼自身の性格や能力ではなく、彼らとともに放牧し、人についてもラクダについても知っているという経験だったという点である。

別のときには、モハメッドのもとにアジュランというクランの老牧夫がディラールを頼みに来た。モハメッドによるとその人物は彼の友人で、普段は遠く離れた放牧地にいるものの、モドガシの周辺にラクダの給水にやってくる際には手伝うのだという。もちろん、モハメッドは彼のラクダについてもよく知っていた。<sup>15)</sup> このように、牧畜民とディラールの関係はクランだけでなく、ラクダを介した個人的な紐帯によっても基礎づけられているのだ。

もっとも、両者の信頼関係はディラールが狡知を駆使するための土壌にもなっている。先に述べたようにディラールは1頭あたり200シリングを報酬として受け取るが、実際にはそれ以上の金額を取引の交渉から引き出すことがある。具体的には、ディラールはしばしばラクダの売り値と買い値のあいだに差額を設け、その分を自分の利益にしてしまう。たとえば、あるときモハメッドのもとにアジュランというクランの青年が2頭のラクダのディラールを頼みに来た。モハメッドは彼と放牧地とともに家畜の世話をした経験があった。モハメッドは青年に対して、1頭あたり20,000シリングで買い手を探すと約束した。実際にはそれぞれ23,500シリングと21,000シリングの買い値で取引をおこなうことができたが、青年には1頭あたり20,500シリングで売却できたと伝えて、その金額を支払った。このようにして、彼は200シリングの報酬に加えて差額分の3,500シリングを懐に入れることに成功した。<sup>16)</sup>

以上はディラールが差額を手にする典型的な手法である。彼らは、それが売り手と買い手の双方との合意のうえで利益を得る行為であることから、ハラール (*halal*) 一神に許された行為に当たると説明する。逆に、いずれかとの合意を破って利益を得るのは相手を騙すことになり、ハラーム (*haram*) 一神に禁じられた行為一だと判断される。両者の違いについて、モハメッドは次のように説明する。

---

14) 2011年1月31日の聞き取りより。

15) 2011年2月3日の聞き取りより。

16) 2011年1月31日の聞き取りより。

たとえば、最初に売り手と「50,000 シリングで買ってくれる相手を探す」と話をつける。買い手側とはそれを下回る、たとえば 35,000 シリングあたりから交渉を始めて、説得して徐々に値段を引き上げていく。最終的に買い手が 60,000 シリングで購入することに合意した場合、そこまで買い値を引き上げたのは自分の仕事の結果だ。したがって、売り値の 50,000 シリングとの差額分の 10,000 シリングを自分のものとするのはハラームではない。

取引の仲介料として 200 シリングを超える金額を要求すること、これはハラームだ。また、次のようなケースもハラームだ。最初に売り手と「50,000 シリングで買ってくれる相手を探す」と話をつけたあとで、買い手側と交渉を始める。買い手が 60,000 シリングで購入することに合意したとする。そのあとになって売り手のところに戻って、「相手は 50,000 シリングでは買わないが、40,000 シリングなら買うそうだ」と言って売り値を下げさせたでしょう。その場合、売り手との当初の合意を破っているため、差額の 20,000 シリングを自分のものにするのはハラールではない。<sup>17)</sup>

このように、ディラールの人々は取引の交渉においてハラールの範囲内で狡知をはたかせることで、自分の取り分を増やそうと狙っている。そして、このことは市場では「公然の秘密」となっている。そのため、市場の売り手と買い手のなかには自分のあずかり知らないところで利益をかすめ取られるのを嫌う者もいる。彼らはその事態を避けるために、ディラールに頼らず自分で交渉をおこなう。ある精肉店の女性店主は、ディラールについて次のように語った。「この仕事を始めてから彼らにディラールを頼んだことはない。私はこの仕事で利益を求めており、彼らは日々の収入を求めている。私は彼らを信用しない。」<sup>18)</sup> また、市場ではときに、自分で交渉すると言い張る売り手の牧夫と、取引は自分に任せて小屋で休んでいるよう促すディラールがやりあう姿が見られた。

興味深いことに、筆者が観察する限り、このようにディラールの仕事にあからさまに懐疑的な態度をとる人々は少数派だった。多くの売り手たちはそうしたリスクの存在を理解しつつも、取引をディラールに一任していたのだ。彼らはディラールの様子を監視することもなく、市場から離れた街を訪ねたり、茶屋で知人と歓談したりしながら取引が終わるのを待っていた。筆者の目には、彼らがディラールの行動に対してあえて無関心を装っているように見えた。その理由と関連していると考えられるのが、ラクダの財としての特殊性である。前節で述べたように、ラクダは「創始者から受け継がれてきた世襲財産」であるため、それは特定の個人のものであっても、同時に一族の、そしてひいてはクランの所有物だとみなされる。したがって、その売却によって得られる利益も広く共有すべきだと考えられている。市場の周りの

---

17) 2011 年 2 月 7 日の聞き取りより。

18) 2011 年 2 月 20 日の聞き取りより。

茶屋では、売り手の牧畜民がおしゃべりの相手に気前よくお茶や料理をふるまう光景がしばしば見られるが、その背景にはそのような規範の存在がある。逆に、売買による利益を独占する者、周りにそのおこぼれを与えない者に人々は冷たい目を向ける。「我々のラクダ」を売って大金を手にするのにお茶さえおごらない吝嗇家 (*bakail*) は、陰口の対象となる。そして、売り手の牧畜民が狡知によって売却益の一部をかすめ取られるリスクに目をつむってまでディラールを信頼し、取引を託す背景にも、同様の規範がはたらいているように思われる。すなわち、彼らはその選択によってラクダの適切な価格を得ているだけでなく、ラクダという重層的に所有される財から得られる利益を独占せず、親族や知人に分配しているのである。

## 5. お わ り に

本論ではここまでモドガシ市のラクダ市場の概要を述べたうえで、この市場で取引を代行するディラールの実践を検討してきた。家畜市場で活動するディラールについて、行政関係者は生産者と消費者が正当に受け取るべき利益を不当にかすめ取る存在であるとして、否定的に評価している。そして、そのような評価は研究者のあいだでも共有されている。たとえばサマターらは、家畜交易のネットワークが長距離にわたって形成されたことで、ディラールをはじめとして流通に関与するアクターが増加したと指摘する。その結果、それらのアクターが商品に何らかの価値を付加していないにもかかわらず、利益を手にしていくという。サマターらはこのような状況を「過剰な流通 (*over-circulation*)」と呼び、低開発の一因として指弾している [Samatar *et al.* 1988]。

たしかに、ディラールたちが狡知を駆使して売り値と買い値のあいだに差額をもうけ、懐に入れているのは事実である。その点で、彼らに対する非難はある意味で妥当である。しかし同時に、この議論は次の2つの点を見落としているように思われる。第一に、ソマリの人々にとってラクダは単なる商品ではない。つまり、彼らははじめから売り物として売却するためにラクダを飼養しているのではない。彼らは貨幣の扱いに疎い「原野の人」であり、ラクダという特別な財を市場に出すためには「一方的な障壁」という規則を乗り越える必要がある。第二に、多くの場合、「原野の人」である牧畜民にとって市場で「街の人」である家畜商人と直接交渉をおこなうのは困難である。彼らがディラールによる取引の仲介を必要とするのはそのためである。さらに、前節の最後に述べたように、ディラールによる狡知的な振る舞いは両者のあいだの信頼関係のうえで成り立っているものとして見なければならない。

このように、彼らはラクダのインフォーマルで広域的な交易に「過剰な流通」をもたらすだけでなく、そのネットワークが機能するうえで不可欠の役割を果たしており、そこには両義性がある。本論はひとつの市場を対象にディラールの活動に焦点を当てた事例研究に過ぎないが、そこで得られた知見は、ディラール以外にも多様なエージェントがどのようにして日々の

実践を通じてネットワークを活性化させているのかについて、さらに分析を深める必要があることを示唆している。

## 謝 辞

貴重な指摘をしていただいた匿名の査読者に感謝申し上げます。

## 引 用 文 献

- イブン・バットゥータ. 1998. 『大旅行記 3』 イブン・ジュザイイ編, 家島彦一訳, 平凡社.
- 楠 和樹. 2019. 『アフリカ・サバンナの〈現在史〉—人類学がみたケニア牧畜民の統治と抵抗の系譜』 昭和堂.
- 湖中真哉. 2006. 『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』 世界思想社.
- 曾我 亨. 2019. 「難民を支えたラクダ交易—治安・早魃・協働」 太田至・曾我亨編『遊牧の思想—人類学がみる激動のアフリカ』 昭和堂, 91–115.
- 内藤直樹. 2019. 「ケアの空間, かりそめの場所—東アフリカの難民キャンプにおける市場の形成」 森明子編『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』 ナカニシヤ出版, 217–237.
- ファーガソン, ジェームズ. 2020. 『反政治機械—レソトにおける「開発」・脱政治化・官僚支配』 石原美奈子・松浦由美子・吉田早悠里訳, 水星社.
- Abir, M. 1965. Brokerage and Brokers in Ethiopia in the First Half of the 19th Century, *Journal of Ethiopian Studies* 3(1): 1–5.
- Besteman, C. and L. Cassanelli. 2000. *Struggle for Land in Southern Somalia: The War Behind the War*. London: Haan.
- Björkman, L. 2021. *Bombay Brokers*. Durham: Duke University Press.
- Cohen, A. 1965. The Social Organization of Credit in a West African Cattle Market, *Africa: Journal of the International African Institute* 35(1): 8–20.
- Dupire, M. 1965. The Fulani-peripheral Markets of a Pastoral People. In P. Bohannan and G. Dalton eds., *Markets in Africa: Eight Subsistence Economies in Transition*. New York: Doubleday & Company, pp. 93–129.
- Gabre-Madhin, E. 1999. *Of Markets and Middlemen: The Role of Brokers in Ethiopia*, MSSD Discussion Paper. Washington, D.C.: International Food Policy Research Institute.
- Hill, P. 1966. Landlords and Brokers: A West African Trading System (With a Note on Kumasi Butchers), *Cahiers d'études africaines* 6(23): 349–366.
- Lewis, I. 1961. *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*. London: Oxford University Press.
- Little, P. 1992. Traders, Brokers and Market 'Crisis' in Southern Somalia, *Africa: Journal of the International African Institute* 62(1): 94–124.
- \_\_\_\_\_. 2003. *Somalia: Economy without State*. Oxford: James Currey.
- Mahmoud, H. 2008. Risky Trade, Resilient Traders: Trust and Livestock Marketing in Northern Kenya, *Africa: Journal of the International African Institute* 78(4): 561–581.
- \_\_\_\_\_. 2010. *Livestock Trade in the Kenyan, Somali and Ethiopian Borderlands*, Chatham House Briefing Paper. London: Chatham House.
- \_\_\_\_\_. 2013. Pastoralists' Innovative Response to New Camel Export Market Opportunities on the

- Kenya/Ethiopia Borderlands. In A. Catley *et al.* eds., *Pastoralism and Development in Africa: Dynamic Change at the Margins*. London: Routledge, pp. 98–106.
- Pavanello, S. 2010. *Livestock Marketing in Kenya-Ethiopia Border Areas: A Baseline Study*, HPG Working Paper. London: Humanitarian Policy Group.
- Republic of Kenya. 2008. *Lagdera District Development Plan 2008–2012*. Nairobi: The Government Printer.
- Samatar, A., L. Salisbury and J. Bascom. 1988. The Political Economy of Livestock Marketing in Northern Somalia, *African Economic History* 17: 81–97.
- Umar, A. and B. Baulch. 2007. *Risk Taking for a Living: Trade and Marketing in the Somali Region of Ethiopia*. Addis Ababa: UN OCHA Pastoralist Communication Initiative.
- UNHCR. 2011. *Camp Population Statistics by Country of Origin, Sex and Age Group* (18 November 2011). Dadaab: UNHCR Dadaab.
- Usman, H., J. Shobowale and J. Caleb. 2009. *The Role of Middlemen in the Marketing of Smoked Fish in Doron Baga Fish Market, Borno State*, Proceedings of the 24th Annual Conference of the Fisheries Society of Nigeria. Akure: FISON.
- Whittaker, H. 2015. *Insurgency and Counterinsurgency in Kenya: A Social History of the Shifta Conflict, c.1963–1968*. Leiden: Brill.